

# 令和6年度 体育部会研究計画

## 1 研究主題

### 子供の主体性を育む 体育学習

— 「おもしろいコト」が共有された世界で主体性を発揮する子供 —

## 2 主題設定の理由

現行の学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育てていくことを目指している。これらの「資質・能力」は、ただもっているだけではなく、自在に活用して個人の人生や社会全体をよりよいものにしていくことが大切である。

以上をふまえ、本体育部会でも、昨年度まで「豊かな学びが子供の未来をつくる 体育学習」を研究主題として掲げ、継続して「資質・能力」に焦点を当てた研究を進めてきた。樹木の生長

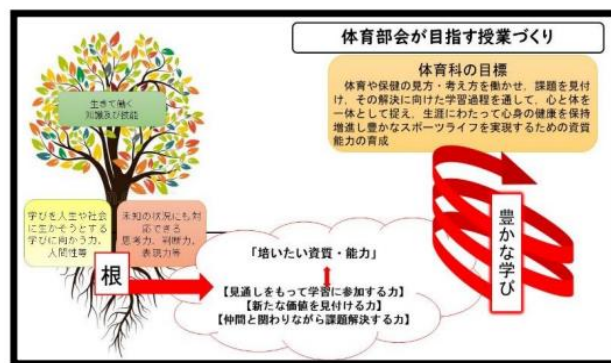


図1 体育部会が目指す授業づくり（令和4年度主題）

（図1）を例に教師は、子供が「うまくなりたい」「よりよくなりたい」と技能の向上や知識の獲得（目に見える花や実、幹）を目指していく中で、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」（目に見えにくい根）が共に育成されることを大切にした授業を展開してきた。しかし、「培いたい資質・能力」がどのような場面で、どのような姿を見とることができたのかについては、課題が残った。そこで、今年度も引き続き「資質・能力」の育成を目指して研究を進めていくが、今回は、「学びに向かう力、人間性等」の中にある「主体性」に焦点を当て、研究を進めていくこととする。その理由を以下に述べる。

「令和6年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題」の中で、教育振興基本計画について述べられている。そこで示されているワードとして「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられている。その2つを実現するために期待されている「資質・能力」として「主体性」が明記されている。では、「主体性」とは一体どういうものなのだろうか。「主体性」とは、「自分の責任（意志や判断）において、自ら行動すること」<sup>【説明1】</sup>と捉えている。これを現代社会の状況に置き換えてみると、コミュニティの中で「主体性」を発揮することは、変化の激しい状況においても自分の信念や価値観に基づきながら、積極的に行動し、新たな道を切り拓くことと言い換えられる。このことは、個人の成長だけにとどまらず、社会全体の革新力や適応力を高め、「持続可能な社会の創り手」へつながると考えることができる。つまり、今後の日本の未来を考えたとき、子供の「主体性」を育むことは重要な要因だと言える。

では、これまでの研究とどこが違うのだろうか。昨年度主題に掲げた「豊かな学び」では、「見通しをもって学習に参加し、新たな価値を見出し、仲間と関わりながら課題解決に挑戦しようとする学び」と捉えてきた。つまり、子供が「どのような学びを展開するか」といった授業づくりをベースに研究を進めてきたと言える。課題解決に挑戦していく中で、「資質・能力」を発揮している場面はたくさんあったと思われるが、研究の成果としてそこにはあまり焦点が当たらなかった。そこで

今年度は、「資質・能力」の1つである「主体性」に焦点を当て、子供がその力をどのようにして育んでいくのかについて研究していきたい。

### 3 副主題設定の理由

昨年度は、副主題『おもしろいコト』の共有を図り、自ら学び続ける授業づくり」を基に、「すべての子供が『おもしろいコト』を共有するために」と、「すべての子供が学び続けるために」の2点を研究内容とした。各郡市が実践した研究のまとめから成果として挙げたものを下に示す。

1) すべての子供が「おもしろいコト」を共有するために

- 安心して取り組める環境づくりでは、いろいろな動きに挑戦し、成功体験が味わえた。
- 「おもしろいコト」の共有から学びをスタートすることで苦手意識を持っている子もそうでない子も、自分なりの課題を見付けそれを解決していこうと意欲的に参加し挑戦していた。
- 「おもしろいコト」を共有することで、すべての子供が単元を通して自ら課題を見付け解決しようと主体的に学習に取り組むことができた。

2) すべての子供が学び続けるために

- 「おもしろいコト」に迫るための問いかけでは、子供たちが自ら課題を見付け、解決しようとする意識づけができた。
- 技術指導を最初からするよりも、子供が指導を求めてきたときにアドバイスをした方が効果的で動きの質が高まったように感じる。
- 見取りの視点として、子供たちの動きの向上だけでなく、動きを向上させるためにどのようなことを考えているかという視点が学び続けていくための支援の実現につながった。

成果の内容から、「挑戦」「自ら課題を見付ける」「解決していく」などがキーワードとして挙げられる。また、こちらから技術を教え込むのではなく、子供の中で必要感が生まれたときにアドバイスをすることは、今年度の研究主題で挙げた「主体性」を育む上で大切な支援だと言える。さらに、子供が動きを向上させるためにどのようなことを考えているかを見取りの視点としてもつことは、結果ではなく学びの過程を評価していく上で重要な手立てである。これらの研究成果からも、今後目指すべき研究の方向性が「主体性」に向いていくことは、必然であると言える。そこで、今年度は、授業を通して目指す子供の姿として「『おもしろいコト』が共有された世界で主体性を発揮する子供」を副主題に掲げ研究を進めていく。

### 4 研究内容

「主体性」とは、「自分の責任（意志や判断）において、自ら行動すること」と捉えた。体育学習では、「主体性」をどのように考えていけばよいらろうか。中山（2018）は著書の中で、「遊びに没頭できる体験を大切にすることが、『資質・能力』を身に付けられる」と述べている。また、『遊びなさい』では『遊び』にならず、子供が自らやりたいと自己決定できる機会を作ってあげてほしい」とも書かれていた。徳島県では、これまでの体育学習でも「遊び」の視点を大切に研究を進めてきた。また、「おもしろいコト」の共有を行い、「環境設定」や「問い」を工夫することで、子供が「やってみたい」と思い、自分なりに挑戦することができる授業展開に努めてきた。つまり、ここ数年に渡って取り組んで来た体育学習を実践していくことが、「主体性」の育成に直結していると

言える。そこで、体育学習における「主体性」とは、「おもしろいコト」(価値観)が共有された世界の中で挑戦(探求)活動をすること(以下挑戦活動)と定義する。「挑戦活動」とは、「上手になりたい」「もっと知りたい」という思いから、自分の責任(意志や判断)において自分の中で学びのサイクルを回すことである。

ここで、「学びのサイクル」について詳しく述べたい。「学びのサイクル」とは、「期待(予想)」「挑戦」「振り返り」だと捉えている。右に示した図2は、「挑戦活動」のイメージを表したものである。子供は、「おもしろいコト」が共有された世界で、「やってみたい」活動に対して、まず自分のこれまでの経験から「こうしたら上手いきそうだな」「こうじゃないかな」と「期待(予想)」をもつ。それをもとに上手いくかどうか「挑戦」してみる。そして、自分の動き(考え)を「振り返り」、「次はどうしようかな」

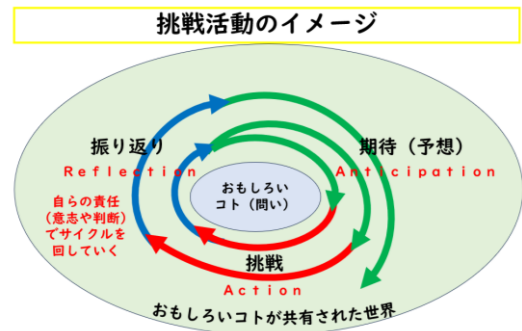


図2 挑戦活動のイメージを表す  
学びのサイクル

「今度は上手いくかな」「これでどうかな」と新たな「期待(予想)」をもつ。ここで気をつけたこととして、教師が学びのサイクルを回すように指示するのではない。なぜなら、「先生に言われたからやってみた。」では、主体性を発揮できないからである。つまり、このような学びのサイクルは、自らの責任(意志や判断)によって回っているのではないだろうか。「主体性」が発揮されている姿は、自ら学びのサイクルを回すことによって現れると考えている。また、学びのサイクルは、「授業中」「1時間単位」「单元ごと」など、いろいろな場面で展開される。子供が学びのサイクルを回すことに意味を見出し、自分から回せるようにしていきたい。

以上のことを受けて、主体性が発揮されている姿を以下のように設定する。

主体性が発揮されている姿

「おもしろいコト」が共有された世界の中で挑戦活動をしている姿

授業を通してこのような子供の姿が見られるように、次の視点で研究を進めていきたい。

### (1) 子供が「主体性」を発揮するための支援

授業展開については、昨年までの研究で大事にしてきたことを継続して行っていく。つまり、「おもしろいコト」の共有を行い、子供が「やってみたい」と思い、自分なりに挑戦できるようにしていきたい。そのために教師は、「環境設定」や「問い」、「支援」などを行っていく。特に今回は、「主体性」を発揮できるようにするための「言葉かけ」に着目していきたい。例えば、「どうしたい」や「どう思う」のように、子供の思いを聞く場面を意識することで、子供が自ら判断できるようにしていきたい。

### (2) 振り返りの充実

活動をするだけではなくて、それぞれの場面における振り返りはとても重要だと言える。中山は、振り返りを分類する中で、「行為の後の振り返り」と「行為の中の振り返り」に着目した。そこで、「行為の後の振り返り」を習慣化すること。そして、挑戦した出来事だけを書くのではなくて、そ

の時の状況、さらには上手くいかなかったことへの原因や対策といった具合に質的にも深めて行くことを進めている。その積み重ねが、「行為の中の振り返り」を可能にすると述べている。そう考えると「行為の後の振り返り」である「1時間単位」を習慣化することが重要だと言えるだろう。副読本にある「学習のあしあと」は、振り返りをする上での支援として有効に働くと考えられる。その際に、子供にどのようなことを書いてほしいのか、振り返りの視点を示すことが大切である。「何がおもしろかったか」「次はどのようなことに挑戦したいか」など、次回への「期待（予想）」へとつながる内容が残るようにしていきたい。このような振り返りを、單元ごとに積み重ねていくことで、自分の学びのサイクルを確立することも期待できる。

### (3) 「主体性」がどのような状況でどのように発揮されているか

(1)と(2)では、子供が「主体性」を発揮するための手立てについて述べた。では、子供が「主体性」を発揮されている姿をどう把握するのだろうか。1つは、「子供の変化」に着目することである。例えば、「小型ハードル走」の学習において、いろいろなコースに挑戦していた子供が、ある時、同じコースに何度も挑戦し始めたとする。そこには、何かしらの理由があるだろう。教師は、その様子から「どうしてそうしたの」と問うことで、子供の主体性を把握することができる。次に、「見取り」が重要になってくると考える。「見取り」とは、子供を観察するだけでなく、その内面に共感して見ていくことである。例えば、「スローイングベースボール」の学習で、今まで3塁側に投げていた子供が、ランナーがいる場面では1塁側に投げたとする。自分がアウトになっても満足そうな表情をしていたとすると、そこには「主体性」が発揮されていると考えられる。もちろん、同じように1塁側に投げたとしても、その理由が「ただチームメイトに言われたから投げた」では、「主体性」を発揮しているとは言えないだろう。

いくつか例を挙げたが、「主体性」を発揮する姿とは、「ボールを1塁に投げた」という姿だけで、発揮されたと言えるものではない。どのような変化があったのか、またどのような教師や友達の関わりからそのような「主体性」を発揮したのかが重要である。

そこで今年度は、研究成果として(1)から(3)をそれぞれに挙げるのではなく、(1)や(2)の手立てによって、「主体性」がどのような状況でどのように発揮されたのかをエピソードとして示してもらいたい。このような方法で、数多くの実践からより多くの子供が「主体性」を発揮する姿を集約していきたい。

## 5 研究方法

### (1) 研究大会において

- 本年度は研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研究会、「第62回中・四国小学校体育研究大会（愛媛大会）」において研究成果を発表する。

### (2) 各郡市部会において

- 研究主題及び副主題の解明に向けて、授業研究会及び研修会を行い、研究成果をまとめる。
- 研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有を図る。

### (3) 各校において

- 体育主任・体育部員を中心に、主体性を発揮する子供の姿がどのような状況でどのように発揮されたのかを把握していく。
- 年間カリキュラムのもと単元学習の実施及び副読本の積極的な活用を通して、子供の主体的・対話的な学びを図り、運動好きの子供を育成し、体力や運動能力を一層向上できるようにする。
- 研究領域・研究学年については、ローテーション表が決定次第示すこととする。

## <参考文献>

- (1) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 体育編」，東洋館出版社，2018
- (2) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 総則編」，東洋館出版社，2018
- (3) 文部科学省，「第4期教育振興基本計画」，文部科学省，2023
- (4) 徳島県小学校教育研究会，「令和6年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題」  
徳島県小学校教育研究会，2023
- (5) 徳島県小学校体育連盟，「第65回徳島県小学校体育科教育研究大会 研究紀要」  
徳島県小学校教育研究会体育部会，2023
- (6) 中山芳一，「学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす」，東京書籍，2022
- (7) 松田恵示，「『遊び』から考える体育の学習指導」，創文企画，2016
- (8) 梅澤秋久，苫野一徳，「真正の『共生体育』をつくる」，大修館書店，2020
- (9) 平野朝久，「はじめに子どもありき」，東洋館出版社，2021
- (10) 白井俊，「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」，ミネルヴァ書房，2020

## ～説明～

<説明1> 「自分の責任（意志や判断）において、自ら行動すること」

### ○ 「責任」

「外から来る責任」 アカウンタビリティ（Accountability）

「内から出る責任」 レスポンシビリティ（Responsibility）

「責任」を2つの意味で区別している。ここでいう「責任」とは、「内から出る責任」をさしている。誰かに「やらされている」のではなく、自分の意志で「やっている」というポジティブな意味で捉えている。

## <補助資料>

(1) 「本質的なおもしろさ」と「おもしろいコト」の捉え（令和元年度 小教研体育部会 研究計画）

### ◆ 「本質的なおもしろさ」と「おもしろいコト」

「本質的なおもしろさ」「おもしろいコト」について研修部で以下のように整理した。

「おもしろいコトの共有」 → 「おもしろいコト」を体験する中で「こういうことを考えていけばいいんだ」と全体で分かち合うこと

#### <運動領域>

「本質的なおもしろさ」 → その運動を成立させるもの

「おもしろいコト」 → その運動に夢中になる出来事（ワクワクドキドキするコト）

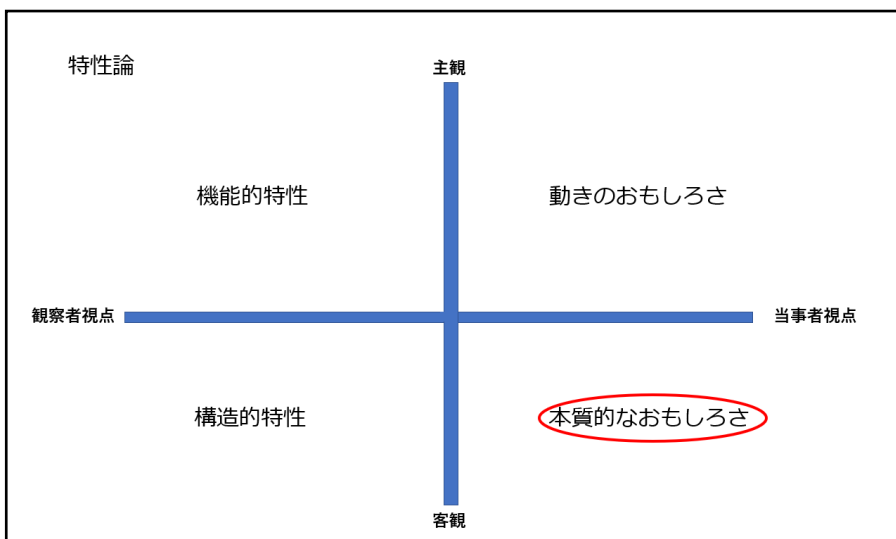
#### <保健領域>

「本質的なおもしろさ」 → 探求するおもしろさ

「おもしろいコト」 → 『保健領域の学習内容』について考えるコト

※ 「おもしろいコト」が「コト」とカタカナで表現しているのは「事」つまり、やる事・する事、出来事という形式名詞を強調したいためである。

(2) 特性論から見た「本質的なおもしろさ」の見方・考え方



(3)本質的なおもしろさの一覧表

領域		本質的なおもしろさ
体 つ く り	体ほぐし	対話するおもしろさ
	多様・体力	操作するおもしろさ
器 械 運 動	マット	移動するおもしろさ
	鉄棒	
	跳び箱	
陸 上 運 動	短距離走	移動するおもしろさ
	ハードル	
	リレー	
	幅跳び	
	高跳び	
水泳		移動するおもしろさ
ゲーム		攻防のおもしろさ
ボ ー ル 運 動	ゴール型	攻防のおもしろさ
	陣取り型	
	ネット型	
	ベースボール型	
表 現	表現	表現するおもしろさ
	リズムダンス	リズムに乗るおもしろさ
保 健	健康な生活	探求するおもしろさ
	体の発育・発達	
	心の健康	
	けがの防止	
	病気の予防	